

1 はじめに

「待つ」と聞いて多くの人がネガティブで否定的な印象を受ける。待ちたくない、無駄だと答える人も少なくはない。しかし一体待つとはどういうことなのだろうか。本当に待つことは無意味なのだろうか。私は疑問に思う。

2 待つの分類

▷ 現代的待つ

私たちが日頃行う「待つ」とは、この後どうなるであろう、どうなってほしいという予めの見込みとその準備から起り、確定された未来を先取りしている予期に近い待つである。その動作には明確な始まりと終わりがあり、「待つ」は有限である。これを現代的待つとする。



▷ 本来的待つ

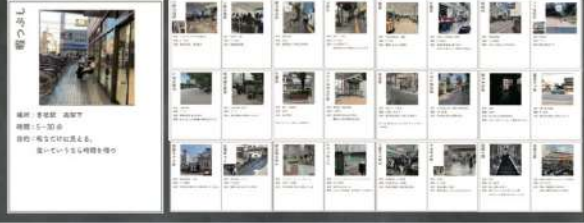
この「待つ」とは日常で行うものとは違う。意のままにならず、時が満ち、機が熟すのを待つような、不確定な未来を想定した希望を含む待つである。それは始まりが曖昧であったり、突発的で明確な終わりがなかったりする。そのため「待つ」は無限に思われる。これを「本来的待つ」とする。



参考文献
 荒田清一「「待つ」ということ」
 大塚治「待つ」
 エトガル・クレット『あの素晴らしき七年』

3 街中の待つ

街中で「待つ」をリサーチしてみた。しかし多くが現代的待つであり、安定した未来が見えているからこそみんな揃って俯き、スマホをいじり、求めている待つとは程遠かった。



4 現代社会

▷ 待たない社会

記述の発達により、現代は待たなくて良い社会になった。ほとんどが予期する未来へ最短で行けるようになったからだ。この便利な世の中で待つ必要はなくなるだろう。



▷ 待てない社会

その反面、待てなくなった。数分の電車の遅延で腹を立て、成功するかわからないものには手を出さない。先が見えず確証の持てないことへの耐性が弱くなっている。そのため望む結果へ確実に最短で行ける手段を選ぶ。時間や気持ちに余裕がないが故に途中にある感情や思考、時の流れは省かれてしまった。その行為はあまりに空疎で無個性である。

5 敷地

▷ 歩行者の街

東京に栄えている駅の中でも渋谷は地下空間が小さくあまり発展していない。さらに北西エリアの道玄坂周辺は商業施設が地上に多く点在している。そのため日々多くの人が地上に溢れ、歩き回っている。しかし人が多いため「止まらない街」でもあると言える。

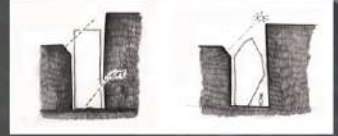
▷ 経済の街

また渋谷は流行を敏感に写し、常に利益を求めている。そのため所狭しと商業施設が立ち並び、人が無償で休める場所はないに等しい。様々な活動が混同しビルが密集する隙間こそ空白の空間であると考えられる。そこで建物の隙間を敷地とする。



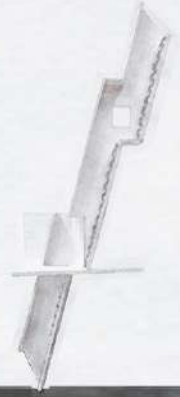
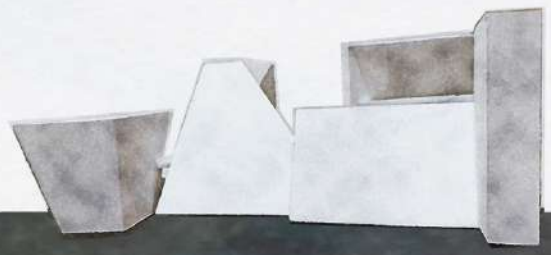
6 設計

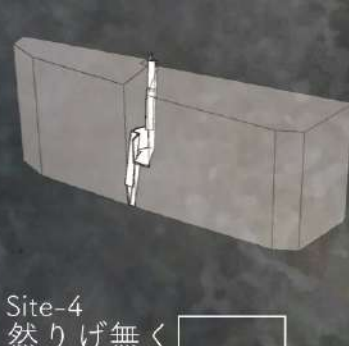
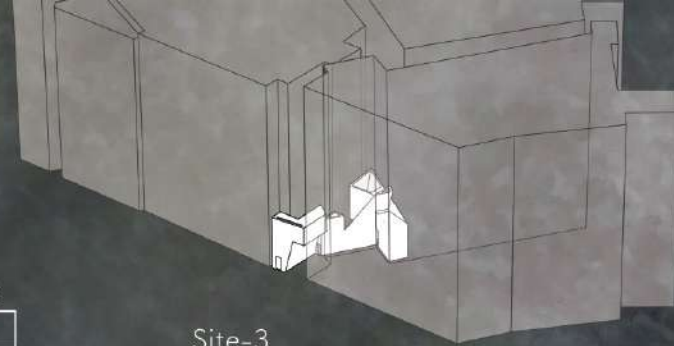
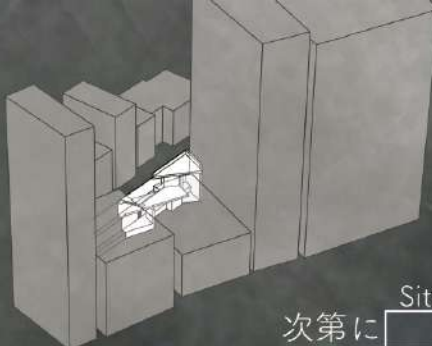
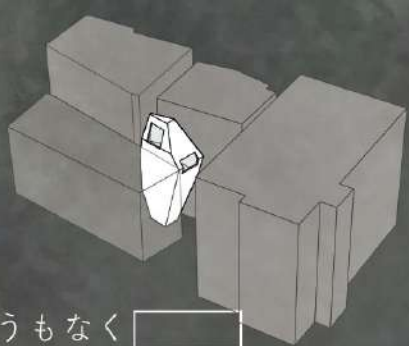
現代で失われてしまった純粹に待つ場所を設計する。そこは用途も目的も利益もない。隙間を縫い、削り、周りに支えられることで自由な形のオブジェとなる。それぞれは行動を制限しないようにエリアに合った副詞的な名前をつける。利用者は今一度自分と向き合い、待つことについて考える。不思議な見た目に人が気づき、何かしらの変化を建築は待つ。渋谷にかつてないこの場所ができることで、いつの間にか何かを待ってしまう。



待つ場所

Waiting & Waited Place





Site-1
どうしようもなく

宿泊、休憩施設が多いこのエリアに迷い込んだ。
3つの建物が生み出す隙間でなんとなくそわそわする気持ちを抱えながら周りを避け、邪魔にならないようにそこに建つ。

Site-2
次第に

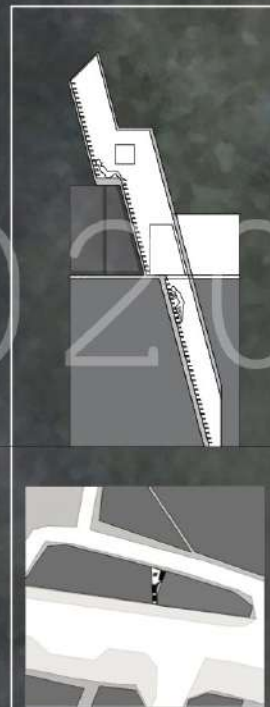
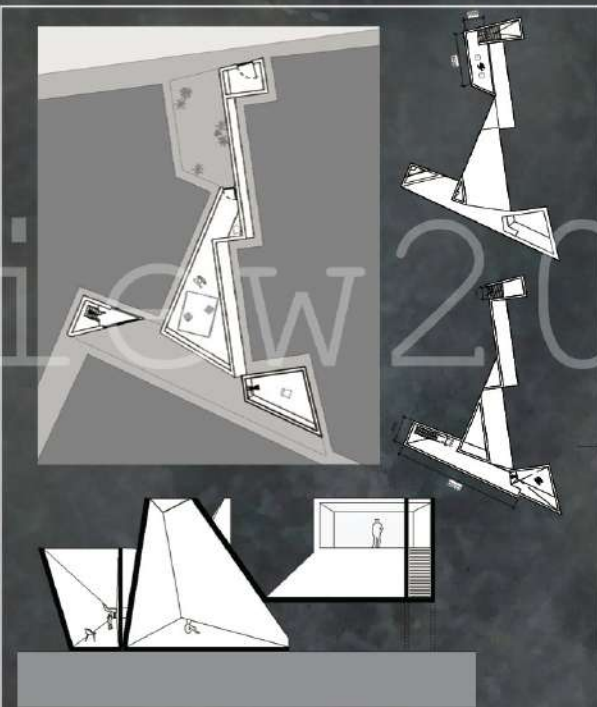
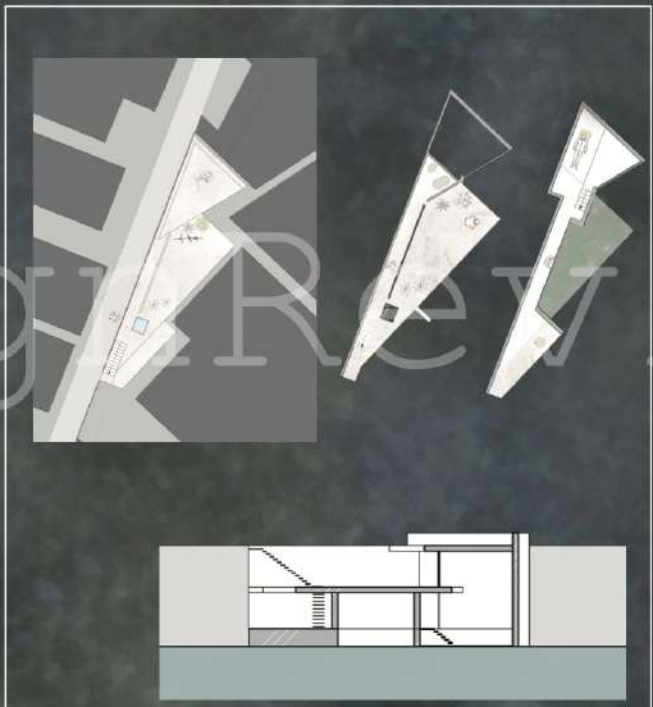
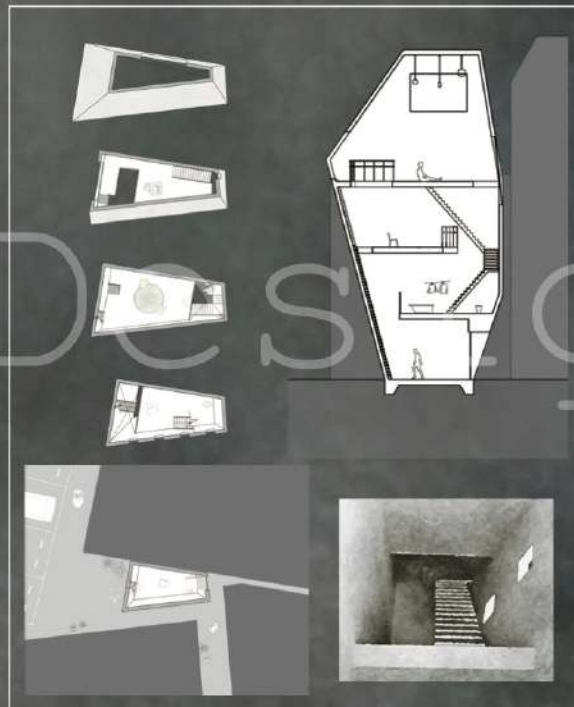
居酒屋や飲食店が並ぶ裏側。決して居心地がいいとは言えない隙間に床ができ、壁ができそして屋根ができる。だんだんと整う環境に知らず識らずのうちにこの建築は出来上がっていく。

Site-3
だいたんに

言わずと知れた流行の最先端「SHIBUYA109」その後ろに堂々と巣食う。3つのボリュームは隙間の外を導線とし、渋谷の街全体がこの建築の一部である。

Site-4
然りげ無く

大型商業施設が並ぶ中、ちっぽけな間にしれっと居座っている。単純に見えて先の見えないもどかしさを感じながら



DesignReview2020



DesignReview2020



DesignReview2020



DesignReview2020

